



消えた街角・富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和35年 品川駅東側埋立て地激変

わが国初の鉄道が開通したころの品川の写真をみると、品川駅は高輪台地を通る東海道に沿った海際にある。鉄道は南に横たわる御殿山を切通しで横断、大森・川崎方面へ伸びている。切られた東海道は八つ山橋で鉄道をまたぎ、上には海が広がって見える。したがって、現在ある品川駅東方の陸地はすべて、大正末期からの埋立て地となる。その最初に手がけられた芝高浜埋立て地には、まず品川操車場ができ、北側には芝浦下水処理場、南側には屠殺場、現・食肉卸売市場が設けられ、都民の近代化する生活を支えてきた。それに続き、高浜運河一つ隔てて埋め立てられた芝海岸通り(現・港南四丁目)には第一次世界大戦末期、海軍経理学校が設けられた。古い方の写真を写したころの品川駅海側東改札口は無人で、出るとすぐ右近くに運河が入り込み、その先には屠殺場、左は草ぼうぼうの広大な操車場で遠く離れた汚水処理場の悪臭が風に漂っていた。そして正面一本道が海岸通りと交差し、高浜運河を渡る木橋には御橋橋の名が付けられていた。その先の広い埋立て地には、海軍経理学校の施設を引き継いだ東京水産大学校だけが見渡せた。そこに、都営港南団地が建設され、高架の高速道路羽田線が建設されたのは昭和三十年代後半、完成は東京オリンピック開催間際であった。また、品川操車場に東海道新幹線の車輛基地が建設されたのも時を同じくする。それでも鉄道のターミナル品川駅で海側改札口へ出るには、広い操車場の下をくぐる素人作りの細く長い地下道しかなかった。今同じ位置に立つて海側風景を見渡すと、感慨ひとしお、新しい土地に始まる新しい歴史を予感する。(昭和35年12月12日 富岡畦草撮影)

文 富岡畦草とみおか けいそつ)
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(平成14年5月13日 富岡畦草撮影)

現在品川では、平成15年秋の完成を目指して「東海道新幹線品川新駅」の工事が急ピッチで進められている。品川新駅は、従来のJR品川駅の隣に併設され、東海道新幹線の始発駅として最大で一時間に4本の便を増設。一日約6万人の乗降客を見込んでいるという。そのほかにも、周辺エリアでは大規模ビルの開発が目白押しだ。これらの駅周辺の再開発によって、「品川」は最も注目されるビジネスエリアとなるであろう。(文:渡辺邦博)